

国語教育における合成AI 活用の危険性と課題

東京大 酒井邦嘉

学校教育、特に国語教育におけるAIの危険性について論じる。文部科学省初等中等教育局は、二〇二三年七月四日に「暫定的なガイドライン」を示した。中でも「活用が考えられる例」の是非は最重要である（『指導と評価』第七〇巻一月号 一八一―二〇参照）。本講演では言語脳科学の視点から、そうした合成AIの活用が学校教育に深刻な問題と障害を新たに引き起こし、全教科において言語力や思考力・創造力の低下につながることを明らかにした。

AIを誤って使えば、教育環境を根本から覆す可能性があり、従来のデジタル技術とは桁違いの危険性をはらむ。十分な思考力が身に付けばデジタル機器を賢く使いこなせるかもしれないが、その逆は成り立たない。子どものうちからデジタル機器を使うことで、言語力や思考力・創造力の健全な成長が阻害され、安易な手段に頼る傾向が助長されるからだ。Chat GPTのように対話を模したのも、話者の意図や意味、文脈の理解はもちろん、論理の解析すら搭載されていないから、あくまで「対話風」なのだ。生成AIは、このようにして正当な指導を阻害するだけではない。二〇二三年を境に、教育現場において生徒の学習活動に対する正当な評価も難しくなってしまう。

電子機器の使用を禁じて文章を書かせたり、口頭試問を尽くしたりしない限り、もはや作文という成果物からは、合成AIの使用を見抜くのは困難だ。合成AIを使えば、自分が生成していないものを自らの文章に取り込むことに対して、抵抗感が減る。そうした行為は剽窃を助長し、倫理性を貶めることになる。ケンブリッジ大学が早々に「作品での生成AIの利用は剽窃と見なす」と断じたのは卓見であった。「合成AIありき」の風潮にあつて、教育では何を最優先にすべきかという判断が揺らいではならない。育てるべきは生徒の全人的な健全性であり、守るべきは精神的な成長ではないだろうか。そこに国語教育や読書の占める位置は極めて大きいのである。

【研究協議会】

国語科における生成AI 活用の可能性と課題

基調講演

酒井 邦嘉(東京大)

シンポジスト

大井 和彦(信州大)

渡邊 光輝(お茶の水女子大附属中)

コーディネーター 記録

安部 朋世(千葉大) 小沢 貴雄(筑波大附桐が丘特別支援)

● 進行等について

話を伺っていて、生成AIが不正確な回答をすることで生徒の意見が活性化することもあるのかと感じた。登壇者同士の協議の後、フロアから意見・質問を受ける。

● 研究協議

【酒井先生への質問】

渡邊 AIを使いこなす力は何か。

酒井 使うことを前提にせず、使わない

ことが重要。

安部 朋世

大井 生成AIに対する社会的制約についてどのように考えているか。

酒井 そもそも機械は考えない。AIに判断を委ねることは危険であり、徹底的な制約や規制が必要である。

【大井先生への質問】

渡邊 「人格的存在として捉える」とあるが、どういうことか。

大井 メタ認知的な視点で考えて、人格的存在ではないんだということを逆接的に意識させたかった。

酒井 生成AIとコミュニケーションが取れるという表現自体に疑問を感じるが、どう考えているか。

大井 生成AIを使いこなすスキル等の以前にある人間性の問題と捉えている。

【渡邊先生への質問】

大井 AIの位置付けについて、どのように生徒に指導しているか。

渡邊 今回紹介した実践では、生成AIの癖・特性を理解することに重点を置いて指導している。

酒井 生成AIは今までの電子機器とは全くの別物。電子機器としての「AIに考えさせる」という表現はおかしい。

渡邊 AIの回答は自分を映す鏡。正しいことを表示しているとは限らないのに、AIの回答が妥当と感じるのはなぜかを考える対象物として捉えている。

安部 無自覚に生成AIを擬人化していることに気付かされた。学習者も使っているが現場ではどう指導していくか。

【フロアからの質問】

フロア 書くことのできない学習者への支援のためのツールとなるとも考えられるが、メリットは何一つないか。

酒井 なぜ書けないのかを正確に分析することが必要。機械任せにはせず、対人間の教育を担っている教師の自分を忘れず指導につなげることが大事。

フロア 脳科学者のなかで、生成AIについて肯定している方はいるか。

酒井 現在のAIは、人間を対象とする脳科学及び言語学とは断絶している。

● まとめ

安部 朋世 生成AIの学校現場における活用は、試行錯誤の段階である。国語教育が大切

にしている、人との関わりの中で言葉の学びがあることを改めて考えることができた。